

第105回全国高校サッカー選手権大会オホーツク地区予選大会

2026年8月29日

会場【BLACK STONES Field（遠軽町）】

報告者【OKFA 技術委員会 TSGグループ】

1. 大会の概要

この大会は、高校生年代で最後のカップ戦であり、選手や指導者において集大成となる大会である。全道・全国へと続く大会でもあり、選手は、高いモチベーションでのぞんでいる。試合時間は80分（40分ハーフ）で行われている。

今回は、決勝（北見北斗高校一紋別・佐呂間・網走桂陽高校合同）を分析させていただいた。当日は、晴天で時折強い風が吹いていたが、良い環境下での試合となった。試合前から両チームの選手やスタッフの気持ちの高まりは十分に感じられた。報告レポートは決勝の1試合だけではあるが、両チームの成果と課題を知り、今後の各カテゴリーチームにおける方向性を探る参考資料として活用して頂ければ幸いである。

2. 両チームへのインタビュー

〈北見北斗高校 平子 裕 氏〉

今日は、相手の出方をよく観ながら攻めていきたいと考えている。ビルドアップから中盤で相手をうかがいながらボールを失わず、隙を狙って崩し、得点を奪いたい。

また、相手が前線から奪いに来る場合は、DFラインの背後を狙ったり、楔に入ったトップの足元に縦のボールを入れて打開していきたい。今までやってきたことに結果がついてきてくれればと思っている。

〈紋別・佐呂間・網走桂陽 稲村 拓海 氏〉

合同チームということで、平日になかなか一緒に練習をする機会はないが、FAリーグ時に調整を図り、チームを作ってきた。

守備に追われる時間が多いと思うが、カウンターをベースにして相手を打開していきたい。トップにあて、湧き上がってきた攻撃陣につなぎ、シュートに結び付けたい。特に、右サイド⑧のスピードのあるドリブル突破に期待している。

3. ゲーム分析

『北見北斗高校 — 紋別・佐呂間・網走桂陽高校』 スコア5-1（前半1-1 後半4-0）

（1）試合データ

北見北斗（以下北斗高）のシステムは1-4-1-4-1、紋別・佐呂間・網走桂陽合同（以下合同チーム）は1-5-4-1でキックオフ。

北見北斗		5	1	紋別・佐呂間・網走桂陽	
前半	後半	時間帯		前半	後半
1	4	スコア		1	0
5	1 4	シュート		7	2
1	8	FK		6	2
1	0	CK		2	1
3	0	オフサイド		0	0
1 8	2 2	ポゼッション(4本以上のパス成功)		2	4

(2) 得点経過

- 前半 7 分 (合) 相手ゴール正面で FK を得る。⑩のシュートは風の影響で大きく曲がり、キーパーが弾いたところを⑤が詰めて先制点を奪う。
- 前半 2 8 分(北) ⑪の鋭いグランダーのパスでサイドチェンジを図る。パスを受けた右サイド⑦から中央のライン間に入った⑪へパスが入る。コントロールが乱れ、相手が弾き出したボールを⑦が回収すると、中央へドリブルで侵入。ゴール前に飛び出した⑮へアウトサイドでパスを通す。抜け出した⑮が落ち着いてゴールを決め同点に追いつく。
- 後半 1 9 分(北) センターサークル付近からの距離のある FK。⑪が右足で豪快なシュートを突き刺す。
- 後半 2 2 分(北) 中盤で⑪がボールを奪い、そのままドリブルで駆け上がる。相手最終ラインから裏へ飛び出した⑥にタイミングよくパスを通し、⑥が落ち着いてゴールを決める。
- 後半 4 1 分(北) ペナルティエリア外で FK を得る。⑪が 2 点目とは逆の左足でゴールを決める。
- 後半 4 7 分(北) GK からつないだボールを中盤で受けた⑪が右サイドをドリブルで駆け上がり、グランダーのクロスを入れる。ゴール前に走りこんだ⑨が冷静にゴールへ流しこむ。

(3) 成果

「多彩な攻撃」

北斗高校は、前半最初こそ引き気味の相手に攻めあぐんでいたが、落ち着きを取り戻すと、本来の攻撃力を発揮していた。バランスを考えたポジショニングと少ないタッチ数でサイドチェンジなどのパスが出始めた。また、無理な突破を図らず、タイミングよく関わった味方へのパスが目立ち始めた。その結果、テンポよくボールを回しながら相手を揺さぶり、ライン間に入った味方に正確な縦パスを入れた後、DF ラインの背後を狙った動きにタイミング良くパスを通し、ゴールに迫る場面が多く見られた。スタッツに見られる後半の数字は、そのことをよく表している。サイズがあり、推進力のある⑮やセットプレー時に左右の足で正確なキックを持つ⑪の存在はチームの大きな強みと言える。

合同チームは、カウンターをベースに突破力のある⑧へロングボールを通してからの攻撃に魅力があった。ゴール前へのクロスボールに果敢に飛び込んでいくプレーにも迫力があった。中盤で攻守のバランスをとる⑥のテクニックも光っていた。

「切り替えの意識(攻→守)」

両チームとも特に、攻撃から守備への切り替えが優れていた。ボールを失った後、即座にボールホルダーへプレスをかけ、その間に守備陣形を整えていた。相手陣でボールを奪い返したり、ボールを下げさせたりする場面が多く見られた。

(4) 課題

★攻撃「味方の駆け引きを最後まで観る」「ハイプレッシャー下でのパス&コントロールの質」

これまでも課題となっているが、オホーツクの各カテゴリーチームが全道大会で勝ち抜くためには、パスとコントロールの精度をさらに上げる必要がある。決勝のゲームでもアタッキングサードでのミスパスやコントロールのミスがなければ、得点に繋がったのでは、という場面が散見された。チームとして意図的に攻撃を仕掛けるためには、「相手を基準としてオフの準備の質を高める」「相手を観て狙いを定める」「ボールホルダーが受け手の意図を最後までよく観る」「止まってボールを受けずに動きながらのプレーの質を高めること」がとても大切な要素と感じた。日常からハイプレッシャーを当たり前の状況にし、上記の観点での認知や判断、プレーの質を高めることが重要であると言える。

★守備「効果的なポジションをとる」

両チームとも、全体をコンパクトにしようという意識でボールを奪おうとしており、お互いの声もよく出ていた。ただ、コンパクトにしたことにより、最終ラインの裏やサイドの空いたスペースを与えてしまい、ケアできていないことも見られた。ボールを奪うために相手にスペースを与えないことも重要であり、そのためのポジショニングや最終ラインのコントロール、GKが果たす役割も大きい。相手のボール状況やオフの選手の狙いを察知し、最終ラインのコントロールをはじめとする守備の連携の精度が求められると感じた。

★守から攻への切り替え→素早いサポートから厚みのある攻撃へ

北斗高校は前述の通り、後半に入ると、引き気味の相手の状況を観て速攻と遅攻を使い分けて攻略する意図がうかがえた。ただ、全道大会は、それぞれの局面で速く激しいプレッシングが予想されるので、ボールを奪取した後、もっと素早いサポート態勢をとり、カウンターやプレス回避を成功させたい。

合同チームは、カウンターをチームのコンセプトにしていたため、ボールを奪うと前線の選手へロングボールを供給する場面が多く見られた。ただ、攻撃陣が前進できない場面でサイドや後方のサポートがないことが多く見られた。ボールを前線に送った後に必ずプッシュアップして味方の間延びを防ぎ、2次、3次攻撃を展開できる態勢をとりたい。個の力のある選手が多くいるため、攻守でそれぞれの関わりや繋がりが広がると、さらにレベルアップが期待できる。

(5) GKのプレー

シュートストップに関しては、強い風が吹いている中、両GKとも常に良い準備を心がけており、シュートに対する姿勢や構えるタイミング、ポジションが安定していた。ブレイクアウェイに関しては、裏に抜け出した相手にタイミングよく対処することができない場面があり、課題が残った。

GKも関わり、ビルドアップしようという場面は、両チームに多く見られた。相手の状況を観て前線へのパントキックを選ばず、攻撃のスタートとして味方に確実につなごうとする意識がうかがえた。

5. 最後に

技術委員会では、2～4種の大会・リーグ戦においてゲーム分析を行っている。冒頭でも述べたように、現状の成果と課題を捉え、オホーツク地区のこれからの指導や次のカテゴリーでの指導に活かしていただければ、という願いがあっての取組である。今回のゲーム分析の内容は、該当するチームだけではなく、他チームにもあてはまる現象があるかもしれないので、各チームで参考資料として活かしていただければ幸いである。

最後に、このTSGレポート作成にあたり多大なご協力を頂きました2種委員会の大会及びチーム関係者の方々に深く感謝申し上げます。

【文責】本大会TSG担当：OKFA 技術委員 岡村 英治・高橋 昂平

